# グループの発達過程の測定法に関する実証的研究

Empirical Study on Group Development Process

黒　崎　優　美

Hiromi KUROSAKI

## 要　約

本稿の目的は、Wilfred Bionの集団理論に基づき実施されたD－グループ（Diagnostic Group）におけるグループ過程の測定法を作成し、その信頼性の検証を行うことである。Bionの集団理論、特に作動グループ、および基底的想定グループ理論に基づき、まず、それぞれのグループ活動を特徴付ける、できるだけ具体的な行動内容の示された測定項目を作成した。次にその項目に従って、D－グループセッションにおけるグループ過程が、内部（観察法）・外部（逐語記録採点法）の両側面から、それぞれ複数の観察者、または採点者によって測定された。内部・外部それぞれについて信頼性を検証するため、測定者間の相関を求めた結果、すべての行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）において、正の相関が有意にみられた。

このようなグループ過程の測定法を用いることによって、統計的処理が困難であるとされているような、臨床的な方法によって得られた理論に関する実証的研究を可能にすることができるだろう。

4

# グループの発達過程の測定法に関する実証的研究

本稿の目的は、D－グループ（Diagnostic Group）におけるグループ過程の測定法について、その開発および信頼性の検証を行うものである。本稿の理論的背景となるBion（1961）の集団理論における基本的ないくつかの概念、およびD－グループの基本的なルールについては他で詳しく論じているのでここでは触れず本題に入りたい（黒崎、1999）。

## 問　題

まず、Bion（1961）の集団理論に基づくグループ過程、すなわち各基底的想定（baP、baF、baD、baFl）および作動グループ（W）を測定するために、具体的な測定項目からなる測定法を開発し、信頼性の検証を行う。

グループ過程の測定法に関して過去の研究を遡ってみると、様々な理論的背景を持った関連性のある研究がいくつかみつかる（Abraham, et al., 1980）が、それらの研究に用いられてきた測定法は、測定者の臨床的判断のみによるものが多く、そのためには豊富な臨床経験、および臨床的知識が必要とされる上、測定者間の相関が得られにくく、また量的にも多くの測定データを得ることが困難であった。この種の研究分野に精密なマニュアルや規則、また尺度が欠けている原因の一つとしてこれらの問題点が考えられる。また先行研究の多くが、グループ過程の測定をある一側面からしか行っていない点についても改良されるべきであると考えられる。以上の点を考慮に入れ、本稿において検証され発展した測定法は、Bion（1961）の集団理論、およびStock & Thelen（1958）やHafsi（1998）の実証的研究を背景とするものである。

まずD－グループの設定状況について述べておきたい。

## 方　法

Dーグループに参加したのは64名の大学生（当時１回生）である。彼等は心理学実験に関する講義の受講生で、セッションはその一環として行われた。なお講義の性質上受講人数を制限する必要があったため、受講生は全て、自ら受講を希望し、更に成績、志望動機等により選考され、受講資格を得た学生である。

参加者は、男女の区別なく、学籍番号順に16名ずつ振り分けられ、４つのグループ（グループ１～グループ４）が構成された。

セッションは、平成９年10月２日から12月22日にかけて実施された。原則として週１回、連続した２コマの講義時間（90分間×２）が使用された。１コマを１セッションとし、休憩を挟んで１回に計２セッションが行われた。１グループにつき６セッション、延べ24セッションが実施された。

１セッションにかけられる時間はすべて統一されるべきであるが、開始前に行われるDーグループのルールと目的についての説明、形式的な質問の処理、そして終了後のディブリーフィング等をすべて講義時間内に行う必要があったため、それを統一することが不可能となり、結果的には１セッション60～85分間となった。

講義の成績評価に関しては、Dーグループの基本的なルール（自由参加、自由表現）が影響を受けることのないよう、参加者全員に等しく単位が与えられ、開始前に、その内容は参加者に伝えられた。

セッションはすべて大学内にある実習室（窓がなく防音設備の整った）において実施された。セッション室のデザインについては他に詳細に述べているので参照いただきたい（黒崎、1999）。

以上の手続きで行われたDーグループセッションにおけるグループ過程は、外部・内部という二つの側面から測定された。内部測定とは、セッションに同室し、Bion理論に基づき作成された測定法に従ってグループ過程の測定を行った観察者によるものであり、外部測定とは、セッション後に

作成された逐語記録の内容を、同じくBion理論に基づき、より発言内容を詳細に吟味できるよう修正の加えられた想定法に従ってグループ過程の測定を行った採点者によるものである。以下、それぞれの経過について具体的に述べる。

### 1）内部測定：観察法

**・測定項目**

観察の目的は、グループ過程、本稿では特に、Bion（1961）の集団理論に基づく、作動グループ、および基底的想定グループを、内部において測定することである。

そのためにまず、各基底的想定タイプ（baP、baF、baD、baFl）、および作動タイプ（W）を特徴付ける、いくつかの具体的な言動が記された測定項目を定めた。

まず、baPグループを特徴付けるのは、つがいとしての２人のメンバーへの期待、未来への楽観的で曖昧な期待の幻想であった。それらの幻想を表す具体的な言動として、２人のメンバーが「同意し合う」、「語り合う」、「合図し合う」、そして「性的な、または特定の２人を意識した言動」、「未来への期待や希望、理想を目指す表現」、「民主主義を強調する発言」、以上の測定項目を設定した。

次に、baFグループを特徴付けるのは、グループは一丸となって敵と闘わなければならないという幻想であった。それらの幻想を表す具体的な言動として、「グループ内の環境に対する攻撃（批判）的表現」、「グループ外の環境に対する攻撃（批判）的表現」、「グループ内の人間に対する攻撃（批判）的表現」、「グループ外の人間に対する攻撃（批判）的表現」、「強い自己主張」、以上の測定項目を設定した。

baDグループを特徴付けるのは、すべてはリーダーから与えられ自分では何をすることもできないという幻想であった。それらの幻想を表す具体

Figure 1.　The Scale Used by the Insider Raters

グループ____　セッション____ー____　月　日（　）観察者_____

| | (Item description)　content | A | B | C | D | E～P |
|---|---|---|---|---|---|---|
| PAIRING | ------（つがい構成）---------- | | | | | |
| | ・同意し合う | | | | | |
| | ・語り合う | | | | | |
| | ・合図し合う | | | | | |
| | ・作業と無関係な２人の会話 | | | | | |
| | ・特定の２人を意識した発言、行動 | | | | | |
| | ------（未来志向）---------- | | | | | |
| | ・期待を連想させるような発言 | | | | | |
| | ・抽象的、理論的な発言 | | | | | |
| | ・理想的な方法を見付けようとする発言 | | | | | |
| | ・民主主義を強調する発言 | | | | | |
| FIGHT | ------（グループ内・外の闘争）---------- | | | | | |
| | ・グループ条件に対する攻撃(批判)的表現 | | | | | |
| | ・グループ外の環境に対する攻撃(批判)的表現 | | | | | |
| | ・グループ外の人間に対する攻撃(批判)的表現 | | | | | |
| | ・トレーナーに対する攻撃(批判)的表現 | | | | | |
| | ・メンバーに対する攻撃(批判)的表現 | | | | | |
| | ------（強い自己主張）---------- | | | | | |
| | ・強い自己主張(自分の意見を押しつける等) | | | | | |
| DEPENDENCY | ------（縦的・横的依存）---------- | | | | | |
| | ・リーダーに対する依存の表現 | | | | | |
| | ・トレーナーに対する依存の表現 | | | | | |
| | ・メンバーに対する依存の表現 | | | | | |
| | ・リーダーをサポートする表現 | | | | | |
| | ・トレーナーをサポートする表現 | | | | | |
| | ------（低い自己評価）---------- | | | | | |
| | ・低い自己評価(自分には何もできない等)の表現 | | | | | |
| | ・無力感の表現 | | | | | |
| FLIGHT | ------（作業・葛藤からの逃避）---------- | | | | | |
| | ・欠席、遅刻 | | | | | |
| | ・会話を避ける | | | | | |
| | ・質問に対して適切に答えない | | | | | |
| | ・笑ってごまかす | | | | | |
| | ・葛藤を避ける | | | | | |
| | ・目線を避ける | | | | | |
| | ------（リラックス）---------- | | | | | |
| | ・寝る(あくび、目をこする等) | | | | | |
| | ・ボーッとする(よそ見をする等) | | | | | |
| | ・退屈そうな態度(ため息等) | | | | | |
| | ・暇潰しを連想する行動 | | | | | |
| | ・グループをリラックスさせる(冗談、笑い) | | | | | |
| WORK | ------（科学的）---------- | | | | | |
| | ・作業に対する具体的な質問 | | | | | |
| | ・作業のやり方の具体的な情報・提案を提供 | | | | | |
| | ------（現実的）---------- | | | | | |
| | ・作業の現実的側面(時間、量)を意識した表現 | | | | | |
| | ・グループ全体を意識した表現 | | | | | |

的な言動として、「リーダーに対する依存（サポート）の表現」、「トレーナーに対する依存(サポート)の表現」、「メンバーに対する依存(サポート)の表現」、「低い自己評価、無力感の表現」、以上の測定項目を設定した。

baFlグループを特徴付けるのは、グループはある対象や、或いは遂行すべき作業を、逃れなければならない敵であるかの様に扱うという幻想であった。それらの幻想を表す具体的な言動として、「会話を避ける（質問に適切に答えない等)」、「攻撃を避ける（笑ってごまかす等)」、「目線を避ける」、「寝る（あくび、目をこする等)」、「退屈そうな態度（ため息、よそ見をする等)」、「暇潰しを連想する行動」、「グループをリラックスさせる言動（冗談、笑い等)」、以上の測定項目を設定した。

作動グループを特徴付けるのは、現実を重視し、科学的な方法を用いて、メンバーの意識的な協力のもとに作業を遂行するグループ活動であった。それらの活動を表す具体的な言動として、「作業についての具体的な質問」、「作業についての具体的な情報や提案の提供」、「作業の現実的側面（時間、量）を意識した表現」、以上の測定項目を設定した。

**・観察者**

観察者は、以上のような手順で作成された測定項目と、各メンバーのアルファベットが記された、Figure 1. に示されるような観察用紙を数枚持って入室し、セッションの間、それぞれの席でメンバーの言動を観察し、誰がどの項目に相当する言動を示したか、その数を記録した。セッションをより細かい単位で捉えるために、15分を１ユニットと考え、観察者は時間を計りながら15分毎に用紙を交換し、測定作業を行った。

**２）外部測定：逐語記録採点法**

**・逐語記録の作成**

セッション後、ビデオに録画された内容をもとに、全セッションの逐語記録が作成された。トレーナーとメンバーによる発言、その発言者（アル

ファベット)、セッション開始からの経過時間についてはすべて記入された。発言以外で記入された事柄は、発言につながるような行動、2人か、或いはそれ以上の小声での会話や笑い、そして沈黙である。

**・測定項目**

逐語記録採点の目的は、グループ過程、本稿では特に、Bion (1961) の集団理論に基づく、作動グループ、および基底的想定グループを、外部において測定することである。測定項目については、内部測定(観察法)の際に作成したものを、行動を除いた発言のみの採点に適したものに修正し、発言内容を更に詳細に吟味できるよう、必要な項目をいくつか追加した。

baPグループでは、行動的要素の多い、2人のメンバーが「同意し合う」、「合図し合う」という2つの項目を除き、同じく2人のメンバーが語り合う、笑い合う等を含む項目として「作業と無関係な2人の言動」を加えた。さらに「特定の個人に対するアプローチ（話しかける、笑いかける)」、「グループ全体よりも個人の単位を重視するような表現」、以上の3項目を加えた。

baFグループでは、「個人よりもグループの単位を重視する」という項目を加えた。

baDグループでは、「指示、援助要求を含む行動や表現（指示を待つ沈黙等)」、「グループ外の環境（親、他のグループ等）に対する依存の表現」、「グループ内の環境（観察者、ルール等）に対する依存の表現」、「グループを依存させるような行動や表現（一方的に指示を与える等)」、「現在よりも過去を重視（美化）するような表現」、以上の5項目を加えた。

baFlグループでは、行動的要素の多い「目線を避ける」、「寝る」、「退屈そうな態度」、「暇潰しを連想する行動」という4項目を除き、「作業から逃げるための沈黙」という項目を加えた。また、「グループをリラックスさせる言動」を、「笑い」と「行動や表現」の二つに分割した。

作動グループでは、「目標達成を意識した表現」、「グループの発達を意

Figure 2. The Scale Used by the Outsider Raters

| | (Item description) content | mark |
|---|---|---|
| PAIRING | ------- (つがい構成) ---------- | |
| | ・作業と無関係な２人の行動(語り合う、笑い合う等) | P 1 |
| | ・特定の個人に対するアプローチ(話しかける、笑いかける等) | P 2 |
| | ・性的な、また特定の２人を意識した行動や表現 | P 3 |
| | ・グループ全体よりも個人の単位を重視するような表現 | P 6 |
| | ------- (未来志向) ---------- | |
| | ・未来に対する曖昧な期待や希望、また理想を目指すような表現 | P 4 |
| | ・民主主義的(みんな仲良く、友達になろう等)表現 | P 5 |
| FIGHT | ------- (グループ内・外の闘争) ---------- | |
| | ・グループ内の環境(セッション室、ルール等)に対する攻撃(批判、反発)的表現 | F 1 |
| | ・グループ外の環境(他のグループ等)に対する攻撃(批判、反発)的表現 | F 2 |
| | ・グループ内の人間(メンバー、トレーナー等)に対する攻撃(批判、反発)的表現 | F 3 |
| | ・グループ外の人間(観察者、友人等)に対する攻撃(批判、反発)的表現 | F 4 |
| | ・個人よりもグループの単位を重視するような表現 | F 6 |
| | ------- (強い自己主張) ---------- | |
| | ・自分の意見への固執、押しつけを含む表現 | F 5 |
| DEPENDENCY | ------- (縦的・横的依存) ---------- | |
| | ・指示、援助要求を含むや表現 | D 1 |
| | ・リーダーに対する依存(サポート)の表現 | D 3 |
| | ・メンバーに対する依存(サポート)の表現 | D 4 |
| | ・トレーナーに対する依存(サポート)の表現 | D 5 |
| | ・グループ外の環境(親、他のグループ等)に対する依存の表現 | D 7 |
| | ・グループ内の環境(観察者、ルール等)に対する依存の表現 | D 8 |
| | ・グループを依存させるような行動や表現(一方的に指示を与える等) | D 6 |
| | ・現在よりも過去を重視(美化)するような表現 | D 9 |
| | ------- (低い自己評価) ---------- | |
| | ・低い自己評価(自分には何もできない等)の表現 | D 2 |
| FLIGHT | ------- (作業・葛藤からの逃避) | |
| | ・作業から逃げるための沈黙 | Fl 1 |
| | ・会話を避ける(質問に適切に答えない等)ような表現 | Fl 4 |
| | ------- (リラックス) ---------- | |
| | ・グループをリラックスさせるための笑い | Fl 2 |
| | ・グループをリラックスさせるような表現(冗談等) | Fl 3 |
| | ・攻撃を避ける(冗談で適当にかわす等)ような行動や表現 | Fl 5 |
| WORK | ------- (科学的) ---------- | |
| | ・作業についての具体的な質問 | W 1 |
| | ・作業についての具体的な情報や提案の提供 | W 2 |
| | ------- (現実的) ---------- | |
| | ・作業についての現実的な側面(時間、量等)を意識した表現 | W 3 |
| | ・目標達成を意識した表現 | W 4 |
| | ・グループの発達を意識した表現 | W 5 |

識した表現」、以上の２項目を加えた。

・採点者

２人の採点者は、このようにして設定された測定項目に従って、逐語記録に記された言動の一つ一つを採点し、その結果を、Figure 2. に示されるようなＰ１～Ｗ５までのマークとして、逐語記録に設けられた欄に記入していった。

### ３）内部、外部測定間における、採点基準の相違点

内部測定、すなわちセッションに同室する観察者がグループ過程の測定を行う場合、細かい仕草を含む、行動的要素の測定が可能であり、それらの項目、すなわち「合図し合う」、「あくびをする」、「目線を避ける」、「ため息をつく」等の項目が設定されたが、外部測定においてはそれらの項目は除かれた。外部測定、すなわち逐語記録におけるグループ過程の採点を行う場合、発言内容をより詳細に吟味することが可能であり、それらの項目が設定され、さらにある一言が意味する内容を、後の会話の発展から遡って測定することが可能となるが、セッションと同時進行的に測定を行う必要のある内部測定においては、それらの吟味は不可能である。

## 結　果

### a）内部測定の信頼性分析

内部測定とは、Ｄ－グループに２人の観察者が同室し、Bion（1961）の集団理論に基づき作成した測定尺度に従って、グループ過程を、個人の言動のレベルで測定したものであった。この測定尺度について信頼性を検証するためには、２人の観察者の間に相関があるかどうかを調べる必要があった。そこで、２人が観察を行った４グループの内、任意に取り出した３グループ（グループ１、２、４）において測定された各行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）につ

いて、Pearson相関係数を求めた。

Table 1. The Correlations (Pearson) Between the Two Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 1)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .80*** | | | | |
| Fight | | .64*** | | | |
| Dependency | | | .49* | | |
| Flight | | | | .58** | |
| Work | | | | | .52* |

*Note*: * $p < .01$; ** $p < .001$; *** $p < .0001$

Table 2. The Correlations (Pearson) Between the Two Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 2)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .77*** | | | | |
| Fight | | .61** | | | |
| Dependency | | | .40* | | |
| Flight | | | | .76*** | |
| Work | | | | | .88*** |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .001$; *** $p < .0001$

Table 3. The Correlations (Pearson) Between the Two Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 4)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .94*** | | | | |
| Fight | | .84*** | | | |
| Dependency | | | .57** | | |
| Flight | | | | .63* | |
| Work | | | | | .72* |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .0001$

その結果、Table．1〜3．において示されるように、すべてのグループと行動タイプにおいて、正の相関が有意にみられた。なおTable．1〜3．において、Ratersとは2人の観察者を表す。

まずグループ1では、つがいタイプにおいて最も高い相関がみられた($r$=.80、$p$ <.0001)。次いで闘争タイプ($r$=.64、$p$ <.0001)、逃避タイプ($r$=.58、$p$ <.001)、作動タイプ($r$=.52、$p$ <.005)、依存タイプ($r$=.49、$p$ <.01）の順に、高い相関がみられた。

グループ2では、作動タイプにおいて最も高い相関がみられた($r$=.88、$p$ <.0001)。次いでつがいタイプ($r$=.77、$p$ <.0001)、逃避タイプ($r$=.76、$p$ <.0001)、闘争タイプ($r$=.61、$p$ <.001)、依存タイプ($r$=.40、$p$ <.05)、の順に、高い相関がみられた。

グループ4では、つがいタイプにおいて最も高い相関がみられた($r$=.94、$p$ <.0001)。次いで闘争タイプ($r$=.84、$p$ <.0001)、作動タイプ($r$=.72、$p$ <.05）逃避タイプ($r$=.63、$p$ <.05)、依存タイプ($r$=.57、$p$ <.01)、の順に、高い相関がみられた。

**b）外部測定の信頼性分析**

外部測定とは、D－グループを録画したビデオをもとに作成した逐語記録の内容から、Bion（1961）の集団理論に基づき作成した測定尺度に従って、グループ過程を、（発言を中心とする）個人の言動のレベルで測定したものであった。この測定尺度について信頼性を検証するためには、2人の採点者の間に相関があるかどうかを調べる必要があった。そこで、2人が採点を行った4グループの内、任意に取り出した3グループ（グループ2、3、4）において測定された各行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）について、Pearson相関係数を求めた。

Table 4. The Correlations (Pearson) Between the Two Outsider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 2)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .60** | | | | |
| Fight | | .79*** | | | |
| Dependency | | | .38* | | |
| Flight | | | | .37* | |
| Work | | | | | .82*** |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .001$; *** $p < .0001$

Table 5. The Correlations (Pearson) Between the Two Outsider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 3)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .61** | | | | |
| Fight | | .46* | | | |
| Dependency | | | .72*** | | |
| Flight | | | | .84*** | |
| Work | | | | | .84*** |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .005$; *** $p < .0001$;

Table 6. The Correlations (Pearson) Between the Two Outsider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 4)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .47* | | | | |
| Fight | | .92*** | | | |
| Dependency | | | .92*** | | |
| Flight | | | | .42* | |
| Work | | | | | .62** |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .005$; *** $p < .0001$

その結果、Table．4〜6．において示されるように、すべてのグループと行動タイプにおいて、正の相関が有意にみられた。なおTable．4〜6．において、Ratersとは2人の採点者を表す。

まずグループ2では、作動タイプにおいて最も高い相関がみられた($r$=.82、$p$ <.0001)。次いで闘争タイプ($r$=.79、$p$ <. 0001)、つがいタイプ($r$=.60、$p$ <.001)、依存タイプ($r$=.38、$p$ <.05)、逃避タイプ($r$=.37、$p$ <.05)、の順に高い相関がみられた。

グループ3では、逃避タイプと作動タイプにおいて最も高い相関がみられた(共に$r$=.84、$p$ <.0001)。次いで依存タイプ($r$=.72、$p$ <.0001)、つがいタイプ($r$=.61、$p$ <.005)、闘争タイプ($r$=.46、$p$ <.05) の順に高い相関がみられた。

グループ4では、闘争タイプと依存タイプにおいて最も高い相関がみられた(共に$r$=.92、$p$ <.0001)。次いで作動タイプ($r$=.62、$p$ <.005)、つがいタイプ($r$=.47、$p$ <.05)、逃避タイプ($r$=.42、$p$ <.05) の順に高い相関がみられた。

### c）内部・外部測定間の信頼性分析

内部、外部それぞれの測定尺度について正の相関が確認されたので、次に、測定尺度間の関係を調べるために、それぞれ2人の観察者と採点者の平均値を求め、同じく任意に取り出した3グループ（グループ1、2、4）において測定された各行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）について、Pearson相関係数を求めた。

Table 7. The Correlations (Pearson) Between the Outsider Raters and the Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 1)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .50** | | | | |
| Fight | | .63** | | | |
| Dependency | | | .63* | | |
| Flight | | | | .54* | |
| Work | | | | | .56* |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .0001$

Table 8. The Correlations (Pearson) Between the Outsider Raters and the Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 2)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .66** | | | | |
| Fight | | .88** | | | |
| Dependency | | | .51** | | |
| Flight | | | | .84* | |
| Work | | | | | .84* |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .0001$

Table 9. The Correlations (Pearson) Between the Outsider Raters and the Insider Raters Regarding the Different Observed Behaviors (case of Group 4)

| | Pairing | Fight | Dependency | Flight | Work |
|---|---|---|---|---|---|
| Pairing | .45* | | | | |
| Fight | | .52** | | | |
| Dependency | | | .42* | | |
| Flight | | | | .42* | |
| Work | | | | | .42* |

*Note*: * $p < .05$; ** $p < .0001$

その結果、Table．7〜9．において示されるように、すべてのグループと行動タイプにおいて、正の相関が有意にみられた。

まずグループ1では、作動タイプにおいて最も高い相関がみられた($r$=.82、$p$ <.0001)。次いで闘争タイプ($r$=.79、$p$ <.0001)、つがいタイプ($r$=.6、、$p$ <.001)、依存タイプ($r$=.38、$p$ <.05)、逃避タイプ($r$=.37、$p$ <.05)、の順に高い相関がみられた。

グループ3では、逃避タイプと作動タイプにおいて最も高い相関がみられた(共に$r$=.84、$p$ <.0001)。次いで依存タイプ($r$=.72、$p$ <.0001)、つがいタイプ($r$=.61、$p$ <.005)、闘争タイプ($r$=.46、$p$ <.05) の順に高い相関がみられた。

グループ4では、闘争タイプと依存タイプにおいて最も高い相関がみられた(共に$r$=.92、$p$ <.0001)。次いで作動タイプ($r$=.62、$p$ <.005)、つがいタイプ($r$=.47、$p$ <.05)、逃避タイプ($r$=.42、$p$ <.05) の順に高い相関がみられた。

## 考　察

本研究の結果から、D－グループにおけるグループ過程を内部・外部の両側面から測定するために開発された測定法は、内部・外部それぞれにおいて、さらに内部・外部測定間において、その信頼性が検証された。

本稿の目的は、前述したように、Bion (1961) の集団理論に基づくグループ過程の測定法を提案することであった。先行研究の問題点として挙げられる、1．測定者の臨床的判断による部分が大きい、2．測定者間の相関が得られにくい、3．グループ過程が一側面からしか測定されていない、以上の点を補えるような測定法にするために、できるだけ具体的な言動を示す測定項目からなる尺度が作成され、グループ過程は二側面から、複数の測定者によって測定された。その信頼性を検証するため、測定者間における相関係数を求めた結果、すべての行動タイプ（基底的想定タイプ:

baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）において、正の相関が有意にみられた。また、内部・外部測定間においても同じく、すべての行動タイプにおいて正の相関が有意にみられた。本研究において提案されたグループ過程の測定法を用いることによって、現在統計的な処理を行うことが困難であるとされているような、臨床的な方法によって得られた理論、特にBion理論に関する実証的研究が可能となるであろう。

**（奈良福祉専門学校　教員）**

（付記）
本稿を執筆するに当たり、貴重なご意見、またご指導をいただきました、奈良大学社会学部Mohamed HAFSI助教授に、心から感謝いたします。

## 参考文献

Anzieu, D., 1984. *Le groupe et l'imaginaire groupal*. Paris: Bordas.

A. Paul Hare., 1962. *Handbook of Small Group Research*. The Free Press.

Armelius, K., & Armelius, B. A. 1982. *Work and emotionality in small groups working with probalistic inference tasks* (Report No.7). Umea, Sweden: University of Umea.

Bales, R. F., 1950. *Interaction Process Analysis*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.

Bales, R. F., 1979. *SYMLOG: A system for the multiple level observation of groups*. N. Y.: Free Press.

Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
池田数好／訳（1973）『集団精神療法の基礎』岩崎学術出版社

Freud, S., 1921. *Group psycholog y and the analysis of the ego*. London: Hogarth Press.
井村恒郎・小此木啓吾他／訳（1970）「集団心理学と自我の分析」『フロイド著作集第6巻』人文書院

Grinberg, L., Sor, D., Tabak de Bianchedi, E., 1977. *Introduction to work of Bion*. trans. A. Hahu. Scotland: Clunie Press. 0
高橋哲郎／訳（1982）『ビオン入門』岩崎学術出版社

Hafsi, M., 1990. The leadership function in training groups: A psychoanalytical approach to group dynamics. *Psychologia*, 33, 230–241.

Hafsi, M., 1998. The Group Valency Constitution, the Dominant Basic Assumption, and the Scapegoating Phenomenon. *Memoirs of Nara University*, 26, 135–149.

Hafsi, M., 1998a. Beyond Group and Irrationality: Bion's Contribution to the Understanding of the Group.

Kets de Vries, & Miller, D., 1984. *The Neurotic Organization: Diagnosing and Revitalizing Companies*. New York: Harper Business.

Klein, M., 1955. Notes on some schizoid mechanisms. In *Developments in Psychoanalysis*. London: Hogarth Press.

Stock, D., & Thelen, H., 1958. Emotional dynamics and group culture. Washington DC: National Training Laboratories.

黒崎優美. 「作動グループと基底的想定グループ～その理論と実践～」奈良大学大学院研究年報 第4号 1999.